

大きなけやきの木の下で 絵本のはなしをしましょうよ。



2024年3月のはじめごろ こまばようちえん

みなさま、こんにちは！幼稚園の桜の花芽がふくらんできました。先日、家の愛犬と散歩をしていたら、沈丁花の良い香りがしてきました。マスクをしても、匂ってきて、春を実感しました。さて今年度最後の「絵本ブックトーク」をお届けします。卒園するかえでさんたちに読んでほしい絵本を、園長先生、竹下眞理子先生にも紹介していただきました。そして近藤千春先生からメッセージをいただきました。これからも子どもたちのそばに、いつも絵本がありますように……。では、大きなけやきの木の下で、絵本のはなしをいたしましょう。

須藤麻江

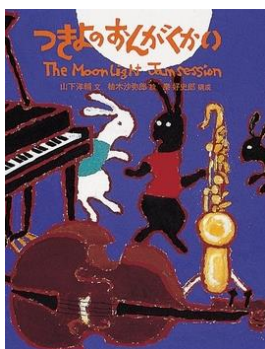
【本のへや】からこんにちは♪ 近藤千春*****
22年前まで駒場っ子だった次男。あのとんでもなく愛おしい日々を記憶の引き出しから取り出すと…鼻奥がツンとします。絵本(児童書)のある子育ては何物にも代えがたい幸せな時代でした。子に教わることのほうが多い、母としての学びの日々でもありました。サンキュー我が子たちよ！(思春期で泣かされたことがあったような気はするけど母ちゃん忘れた・笑。このへんの話はまたいつか…)
さて、わたしがみなさんにお伝えしたいことの一番は、とにもかくにも、「親子で楽しめる素敵な本を、字が読めるようになっても我が子に読んであげてください」ということです。体が触れあっていればなお素敵。それはなぜって？まず一番は、「深いよろこびの共有は親子の信頼関係を強くする」「親に愛され大切にされていることの実感、子の自己肯定感を育み、生きるための精神的土台になる」から。このことだけでもありがたいのに、なんと、すばらしい副産物(おまけ)までついてきます。たとえば、「聞く力」「共感力・想像力」「自他を知る」などなど、

たくさん。

どんな本を選べばいい？ 親が好きな・読んでやりたい本を。親の楽しさがまっすぐに伝わります。ただ、どんなことにも共通していることですが、良し悪しはありますので、時代を越えて子どもたちを満足させてきた「基本図書」をまずはオススメします。ベーシックの次には「多読乱読」もいいですね。

なんやかやと忙しい～！大変～！な我が子との暮らし。でも、我が子をベタベタ可愛がれる時間は、残念ながら長くはありません。これからの「子育ての旬」をできるだけ前向きに楽しんで過ごすためにも、親子でたくさん「心を動かす」ことのできる絵本や児童書は、大きな味方になってくれますよ♡（近藤千春）

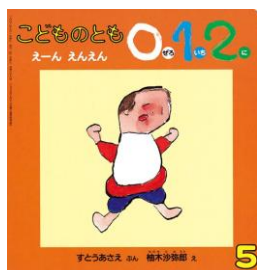
① たんぽぽ組・年少組のみなさんに。



● 「つきよのおんがくかい」

山下洋輔 作 柚木沙弥郎 絵 福音館書店 1999年/1320円

ジャズピアニストの山下洋輔さんが文章を書き、1922年生まれの柚木沙弥郎さんが絵を描き、絵本作家のはたこうしろうさんが構成した絵本です。もうそれだけでワクワクしてしまいます。山下氏の文章は文と言うより、音楽です。満月の夜にこうちゃんが山のてっぺんで月を見ようと山に登ります。すると向こうからピアノを担いだクマがやってきます。次々演奏家たちが集まってきて演奏会が始まります。♪シャバダ ドゥビドゥン ドバタトン キャキャン キョン♪ 正確に読もうなんて思わずに、自然なリズムで楽しんでください。山のうさぎたちといっしょに、踊っちゃいましょう。イエーイ！（須藤）



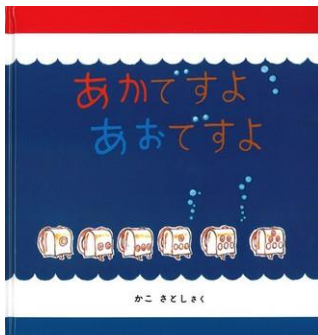
※柚木沙弥郎さんが、今年の1月31日に亡くなりました。102才でした。私は「えんえんえん」(012 福音館書店 2002)で柚木さんに絵を描いていただきました。大事な一冊です。



● 「ぶぶるん ぶるぶる」

まつもとさとみ 作 あずみ虫 絵 ほるぷ出版 2019年/1540円

ことはあそびの絵本です。「ぶぶるん ぶるぶる そらを とぶのは ヘリコプター」。ページをめくると、「ぶるぶる ぶるぶる とんでる とんでる ヘリこぶたー」。どこが変わったか、わかります？ こんな感じで、物語(?)は展開していきます。言葉遊びも面白いのですが、あずみ虫さんの絵も面白いです。アルミ板を切って貼る手法で描かれていて、独特の味わいがあります。今回のブックトークでは、あずみ虫さんの作品をもう1作紹介しています。そちらはあずみ虫さんの作で「ホッキョクグマのブック」です。(須藤)



● 『あかですよ あおですよ』

かこ さとし 作 福音館書店 1995年/990円

タコの子どもたちが通う「たこたこがっこう」は海の中。子どもたちは、たこせんせいの色のお題に答えていろいろな色の絵を描いていきます。赤い絵は、りんご・いちご・だるま…。黄色の絵は、いちょう・レモン・モンキチョウ…。みんなで大喜びしながら、白い色の絵までは楽しく順調に描き進めてきたのですが、「黒」のお題でピタリと絵筆が止まります。

でもね、ひとりだけ、黙々と描いている子どもがいました。ろくちゃんです。ろくちゃんの絵とその描き方にインスパイアされた他の子どもたちは、安心してろくちゃんの真似をして描き始めるのですが、あらら大変～。だってほら、タコといえば黒い〇〇！

ゆかいなおはなしの中で、乗り物に一途なろくちゃんの個性がキラリ☆ (近藤)



● 『3じのおぢあにきてください』

こだま ともこ 文 なかの ひろたか 絵 福音館書店 1977年/1100円

まりちゃんが野原でれんげを摘んでいると、笹船(ささぶね)が小川を流れてきました。船には手紙が結んであって、それは「3じのおぢあにきてください」で始まる招待状でした。家までの地図も描いてあります。差出人は「みどりのみどり」。ケーキをつくって待っているという「みどりのみどり」って、いったい誰なんでしょう。

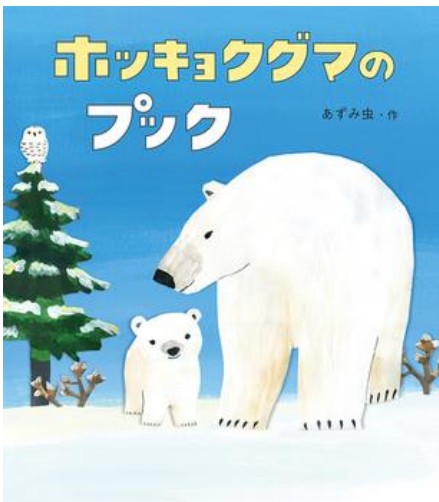
やわらかそうな新緑の原っぱや、タンポポ・ヒメジョオン・つくしなど春の花いっぱい道々でひとりずつ増える友だちと一緒に、まりちゃんは謎の差出人を訪ねます…。

ワクワクドキドキ、読後感も最高のハートウォーミングな春のおはなしをぜひどうぞ♪

ちなみに、物語の構成を大人目線で解釈すると、「伏線」になります。そういう意味でもこの絵本は、幼い子どもが心から楽しめる、優れた「子どもの文学」だと思います。(近藤)

)

② 年中・年長組のみなさんに。



● 『ホッキョクグマのブック』

あずみ虫 作 童心社 2023年/1650円

あずみ虫さんは、写真家の星野道夫さんを敬愛していて一年をアラスカと日本、半々で生活しています。ある日作者はカナダのチャーチルでホッキョクグマの親子に出会います。「子グマは母ぐまに甘えたり、母グマのうごきをまねしたり、いろいろな姿を見せてくれました。」とあとがきに書かれています。野生のホッキョクグマが見せてくれた姿をアルミ板を切り取る技法で描いています。迷子になった子グマのブックが怖い思いをするけれど無事にお母さんと会えるというシンプルなストーリーです。何度も読みたくなる絵本です。(須藤)



● 『いっぽ、にほ・・・』

シャーロット・ゾロトウ作 ロジャー・デュボアザン絵 ほしかわなつこ訳
童話館出版 2009年/1540円

お母さんと小さな女の子がお散歩しながらいろいろなものに出会い、そして家に帰る、というお話です。いっぽ、にほ……。すいせんの花のいいにおいや、風にはためくせんたくものや、きらめく小さな白い石、灰色猫などなど。各場面は必ず、いっぽ、にほ……から始まります。家にもどって玄関の階段を一段登ったところで、女の子はお母さんに両手をのばして「だっこ」。抱き上げたお母さんが、「なんて楽しいお散歩だったこと。それに、なんてたくさんのもので出会ったことでしょう・・・」と女の子に話します。けれども女の子はすでに夢の中。ただそれだけのお話です。小さな人の果てしない好奇心に導かれての散歩も、また楽し、です。(須藤)



● 『びくびくピリー』

アンソニー・ブラウン作 灰島かり 訳 評論社 2006年/1760円

ビリーは心配性で、いつもびくびく。夜もなかなか眠れない。泊まりに行ったおばあちゃんの家で、ビリーはおばあちゃんにうちあけました。するとおばあちゃんは、小さな小さな六つの人形をビリーにくれました。「しんぱいひきうけにんぎょう」です。この人形を枕の下に入れると代わりに心配してくれるから、眠れるよ、と。その日からビリーはぐっすり眠れるようになりました。が、何日か経つと、また心配で寝られなくなりました。その人形たちのことがかわいそうになったのです。…でも、ビリーは、とてもとてもいいこと(!)を思いついて、何かを作りました。それからはやっと安心して眠れるようになり、あんまりびくびくしなくなりました。さて、ビリーは何を作ったと思いますか？

小学校でも人気の絵本。ちなみに、「しんぱいひきうけにんぎょう」は、中央アメリカの国・グアテマラに、昔から伝わる人形なんですって。素敵。(近藤)



● 『とぎつね せかいのはてへ ゆく』

A・トムパート作 J・ウォールナー絵 ほしかわなつよ訳
(童話館出版) 2002年/1595円 重版未定

家の周りで遊ぶのに飽き飽きしていたきつねの女の子が、「世界の果て」へ行くおはなし。なんて壮大！…めくるめく想像の世界は、読んでもらう子どもたちの冒険への憧れと、自分もそうだったらいいのにと願う夢を満足させてくれることでしょう。なんととっても、きつねの生き生きとしたおしゃべりに応える母さんギツネの絶妙な合いの手には、頬がゆるんじゃう。そう、このお母さんは、ただものではありません。わたしが思うに『マリー・ルイズいえでする/N・S・カールソン文アルエゴ&デューイ絵(童話館出版)』のお母さんマンガース、『もりのなか/マリー・ホール・エッツ作(福音館書店)』『ピッツァぼうや/ウィリアム・スタイグ作(らんか社)』に出てくるお父さんたちのように、“子どものそばにいる成熟した素敵な大人”です。お手本にしたい！

楽しくてイキのいい文章を読んでいると元気になるし、清潔感のある繊細な色鉛筆画は柔らかく、母娘きつねの関係性と相まって優しい気持ちになります。

(近藤)

③ 大人のみなさんに。



● 『真夜中のちいさなようせい』

シン・ソンミ作 清水知佐子 訳 ポプラ社 2021年/1650円

韓国の絵本です。熱を出した息子を看病して疲れてしまい、眠ってしまったお母さん。すると、「あたしたちがママのかわりにかんびょうしてあげる」と言いながら妖精たちが現れます。お母さんが小さかった頃に一緒に遊んだ妖精たちです。男の子の熱も下がり、目を覚ましたお母さんは、子どもの頃妖精にあげたお花の指輪を見て、「あら、このゆびわ…。」お母さんはいつの間にか少女に戻って男の子と妖精と遊びます。なんてすてきな展開でしょう。大人は皆こどもだった時があるのですが、その時のことを成長すると忘れてしまいます。ときどき、自分の中にいるこどもの私と出会いたいですね。とにかく、妖精たちがとてもかわいいんです！ぜひ場面ごとに妖精たちの行動をチェックしてみてください。猫にも楽しませてもらえますよ。(須藤)



● 『教養は児童書で学べ』

出口治明 著 光文社新書 2017年/924円

このタイトルに思わず目がクワッ！！著者は、「現代の“知の巨人”」とも称される、稀代の読書家・出口治明氏です。

出口氏は言います。「子ども向けに本を作ろうとしたらごまかしがききません。つまらないとすぐにそっぽを向いてしまいますから。だから、いい児童書は、無

駄をすべてそぎ落としたうえで、ていねいにつくってあるのです。子どもの気持ちにならないと楽しめない本ではなく、大人も大人として楽しめます」そして、美智子上皇后・著『橋をかける 子ども時代の読書の思い出』を世界最高の読書論だと引き合いに出しながら、こう続けます。子どもが自分の世界を広げていくときに役に立つのが児童書。ときに折り合いのつかない自分との間に橋をかけ、他人との間に橋をかけ、自分を理解し他人を知る。そうした経験があればあるほど人生は楽しくなる、と。

1章ごとに、出口氏選りすぐりの10冊が紹介されています。最初の1冊目は絵本。それもエリック・カール『はらぺこあおむし』(!) 最後の10冊目はC・Sルイス『ナルニア国物語』←大同感〜! だってこの本は一言でいえばまさに「善と悪の戦い」。もしも子どもの頃に読… って、ああ、すみません、ちょっと興奮してきました。ちなみに第4章はこんなタイトルでこの児童書→「どんな人生にも雨の日があるから『アンデルセン童話』を読む」。世界史にも通じる博学な氏の、深い解釈に裏打ちされた1冊ずつの軽妙な解説に、グングン読みたくなります。気になる児童書の章だけでもぜひぜひ♪(近藤)

もうすぐ卒園する年長さんへ

～小学生になっても読んでもらってね。楽しい読み物～

◎杉本裕子園長先生から。



●『海へのあさ』

ロバート・マックロスキー 文・絵 石井桃子 訳

岩波書店 1978年/1870円

ある朝、海べの家で、明るい日差しに目を覚ましたサリーは、ふと自分の口中で歯が1本ぐらぐらしていることに気づきます。大変! 病気になっちゃった! 楽しみにしていたバックス・ハーバーに行けなくなっちゃう!

初めてのことに動揺しながらも、サリーが抜け落ちていたカモメの羽を拾った

り、動かなくなったボートのエンジンのプラグを新しいものに交換したりという出来事に重ねて、大きくなること、新しくなることへのイメージを膨らませていく様子が描かれていきます。サリーの様々な疑問に対して、淡々と正確な事実を答えるお父さんと、ちょっとふざけながらも楽しく受け止めてくれる周りの大人たちも、味わい深く登場しています。

大判見開きのページ一杯にモノクロで詳細に描きこまれた、美しい絵の中には、きっと年長組の今頃の子どもたちにわかること、知っているものもたくさん見つけられて、楽しめるのではないのでしょうか。ハマグリのスープ、一緒に味わえたらいいですね。(杉本裕子)

◎竹下眞理子先生から。



●『カラーモンスター きもちはなにいろ?』

アナ・レナス 作 大友剛 訳 永岡書店 2020年/1650円

カラーモンスターは、いろいろな気持ちをごちゃごちゃしています。女の子と一緒に、ごちゃごちゃだった気持ちを色分けして整理していきます。いろいろな色に気持ちを分けていきますが、さて、最後の色はどんな気持ちなのでしょう?

これから、小学校という新たな世界で出会うこと、出会う人たちの中で、様々な想いを味わうことでしょう。時には立ち止まって、カラーモンスターのように、気持ちを色分けしていくのも良いかもしれませんね。私自身、いつも励ましてもらい、背中を押してもらっている一冊です。(竹下眞理子)

◎近藤千春先生から。



●『さかさ町』

F・エマーソン・アンドリュース作 ルイス・スロボドキン絵 小宮 由 訳
岩波書店 2015年/1540円

「さかさ町(まち)」では、家も看板もみんな逆さま。子どもが生き生きと働き、病院では患者ではなくお医者さんが待たされ、病気になったらお金は払わなくてもいい(健康な人々が払うシステム)。学校では忘れることを学ぶ「わすれよ科」があって…というぐあい。子どもは驚きながらもおもしろがるし、大人はハッとしたり考えさせられます。

良質な児童書だけが持つ特長があります。それは、「子どもも楽しい。大人も楽しい」こと。この本はまさにそんな本です。小学校中学年くらいから楽しく一人読みできるかな。でも、ぜひ読んでやったださることをオススメします(わたしは大きくなっても断然読んでやりたい派♪)。おはなしの楽しさの共有と、耳からの「楽しい」読書ができることを保証します。著者のあとがきも素敵なのでぜひ。そうそう、前に挙げた『教養は児童書で学べ』で出口氏も絶賛している1冊ですよ(第5章『さかさ町』で頭と心をやわらかくする)。(近藤)

-
- 絵本は ①たんぽぽ・年少 ②年中年長 ③大人の方へ、というように対象年齢にそって紹介しています。ただ対象年齢はあくまで目安です。お子さんが興味を示した絵本、お子さんに読んであげたいなと思った絵本を見つけたら、手にとってみてください。
 - 「重版未定」の絵本も積極的に取り上げています。図書館に入っていますし、リクエストが多くなると復刊される可能性もあります。
 - 紹介した絵本は藤井チズ子前理事長からいただいた寄附金で購入して本の部屋に入れています。藤色のテープが目印です。
 - 本の価格は税込です。